



エリシャ、ナアマンの贈り物を断る Wikipedia



2022年11月6日 説教「ゲハジの罪」

列王記第二5章20～27節

重い皮膚病をいやされたナアマンはエリシャの言葉を受け入れて川に入り、癒されてきよめられました。そのお礼として、預言者エリシャに持って来た貢ぎ物をささげようとしてしました。しかし、エリシャはそれを受け取りませんでした。

1. ゲハジの思惑 (20～21 節)

- ①ゲハジ (20)「そのとき、神の人エリシャに仕える若い者ゲハジはこう考えた。」ゲハジは預言者エリシャのために働く若者でした。シュネムにおいて、裕福な女が自分の家の屋上を提供した時に良い働きをしました。彼女の必要を伝えたのがゲハジでした。子供が命を落としてエリシャの所にやって来た時にも仕えていました。エリシャがギルガルに移ってからも主人のために働きました (4章)。そして、アラムの将軍ナアマンがツアラアのいやしを求めて、エリシャの許にやってきた時も、僕としての働きを継続して行っています。ナアマンが癒され後、ゲハジは思ったのです。
- ②ゲハジはあとを追いかけて (20)「『なんとしたことか。私の主人は、あのアラム人ナアマンが持って来た物を受け取ろうとはしなかった。主は生きておられる。私は彼のあとを追いかけて行き、必ず何かをもらってこよう。』」ゲハジは主人であるエリシャが、アラム人ナアマンに癒しのわざに関わったことをみていました。しかし、貢ぎ物を受け取らなかったことに納得できませんでした。そこで、彼は既に帰り路についていたナアマンを追いかけて、何らかの報酬を受けるべきだと思ったのです。
- ③ナアマンは戦車から降り (21)「ゲハジはナアマンのあとを追って行った。ナアマンは、うしろから駆けつけて来る者を見つけると、戦車から降りて、彼を迎え、『何か変わったことでも』と尋ねた。」ゲハジはエリシャの許しも得ずに、ナアマンのあとを追って行きました。「駆けつけた」とありますが、馬か騾馬にでも乗って行った可能性もあります。やがて、ナアマンの方も、後ろからの気配に気づきました。近くに辿りついたゲハジを見つけて、ナアマンは戦車から降りました。そして、ゲハジにたずねたのです。「何か、変わったことがあったのかね」。ナアマンにしてみれば、ゲハジの追ってきた目的がわかりませんでした。

2. ゲハジの要請へのナアマンの対応 (22～24 節)

- ①ゲハジの作り話 (22)「そこで、ゲハジは言った。『変わったことはありませんが、私の主人は私にこう言ってよこしました。(たった今、エフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若い者が私のところにやって来ましたから、どうぞ、彼らに銀一タラントと、晴れ着二着をやって下さい。)]」以下はゲハジの作り話です。ゲハジ

は主人のエリシャの緊急の伝言として、ナアマンに伝えました。エフライムの山地から来た預言者仲間の若い二人が来て、彼らの窮状を訴えたのです。どうか、彼らのために銀一タラントと晴れ着二着を買いでいただけませんかという内容でした。ゲハジなりに懸命に考えて作った話だったことでしょう。

②要請を受け入れたナアマン (23) 「するとナアマンは、『どうぞ、思い切ってニタラントを取ってください』と言って、しきりに勧め、二つの袋に入れた銀ニタラントと、晴れ着二着を、自分のふたりの若い者に渡した。それで彼らはそれを背負ってゲハジの先に立って進んだ。」ナアマンは病が癒されて、感謝と喜びで満たされているのですから、ゲハジからの要請をすぐに受け入れます。ゲハジがエリシャの従者であることは確認済みですから疑いませんでした。「どうぞ、それなら二万タラントを取って下さい」。一万タラントも上乘せしてくれました。晴れ着も二着。一着加えてくれました。それを二袋にし、若い者達二人に届けさせることにしました。彼らはゲハジの先にその荷物を持って運んだのです。

③ゲハジは貢ぎ物を隠す (24) 「ゲハジは丘に着くと、それを彼らから受け取って家の中にしまい込み、ふたりの者を帰らせたので、彼らは去って行った。」丘というのは、エリシャが住んでいたギルガル周辺にあったのでしょうか。エリシャが住んでいた家には、ゲハジの部屋もあったかもしれません。彼はわかりにくい所に隠したのです。そして、荷物を運んでくれた二人には労いの言葉を言って、送りだしたことでしょう。

3. エリシャの厳しい対応 (25~27 節)

①エリシャの質問 (25) 「彼は家に入って主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。『ゲハジ。あなたはどこへ行って来たのか。』彼は答えた。『しもべはどこへも行きませんでした。』」ゲハジは主人エリシャの家の前に立つことになります。エリシャはゲハジに質問します。「お前はどこに行き行って来たのか。」すると、ゲハジは嘘をつきます。「しもべはどこにも行きませんでした」。

②ゲハジを問い詰めるエリシャ (26) 「エリシャは彼に言った。『あの人があなただけを迎えに戦車から降りて来たとき、私の心もあなたといっしょに行っていたのではないか。今は銀を受け、着物を受け、オリーブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受け取る時だろうか。』」しかし、エリシャは問い詰めます。ナアマンがあなただけを迎え、戦車から降りて来たのではないか。エリシャはその場にいませんでしたが、空間を越えてその事を見させられていたのです。自分の心がゲハジと一緒にあったとすら伝えているのです。そして、言います。「あなたは、今の時期は銀や着物、オリーブ畑やブドウ畑、羊や牛、男女の奴隷を受け取って良い時だと思うのか」。ゲハジの心の中をえ

ぐるような言葉でした。

③ゲハジに病が (27) 『「ナアマンのツアラアトは、いつまでもあなたとあなたの子孫とにまといつく。』彼はツアラアトに冒され、雪のようになって、エリシャの前から出て来た。」そして、エリシャを通して伝えられたのは、ゲハジと家族への厳しいお言葉でした。つまり、ナアマンの病であったツアラアトがゲハジと子孫にまでまといつくことになるかと告げられたのです。すると、ゲハジは雪のように白くなり、雪のようになったのです。ゲハジは時を移さず、ツアラアトになったのです。

《結論》ゲハジはそれなりに忠実なしもべでした。主人エリシャの命ぜられるま

まに行ってきました。ところが、その彼が主人から言われぬことを勝手に行ってしまったのです。それは彼の内に潜む、肉の思いでした。「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父からでなものと

ではなく、この世からでたものです。」(Iヨハネ2:16)とありますが、ゲハジ

はエリシャがナアマン將軍の重い皮膚病を直すことに関わったのに、御礼の報酬を受け取ろうとしなかった様子を見ていました。彼はとてももったいないと思いました。示された銀十タラントがあれば、何年でも遊んで暮らせます。あれを受け取らないのはおかしいと思ってしまったのです。元々、それはゲハジが考える領域のことではありませんでしたが、彼はお金に目がくらんだのです。そして、それを得るために必死でした。偽りの話を作ってナアマンにそれを伝え、お金と晴れ着をだまし取り、エリシャの前では嘘をつき、欺いたのです。罪は次の罪を生むことになります。「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生み出します」(ヤコブ1:15)とある通りです。

聖書には同じような話が出てきます。ヨシュア記6章でエリコの城を攻める時に、主は「聖絶のものに手を出すな。」(18節)と戒められたのです。エリコは不思議な助けを得て、勝ち取ることができました。しかし、カルミの子アカンは「聖絶のものをいくらか取った」(7:1)のです。その結果、次の町アイに進んでも勝利できなかったという出来事がありました。アカンは戦利品を自分の物にしても問題ないだろうし、ばれることもないだろうと高を括りました。神を侮った結果、アカンは裁かれたのです。

使徒の働き5章にはアナニヤとサツピラという夫婦が出てきます。彼らはサタンに心を奪われて、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのです。ペテロは「それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、

神を欺いたのだ。」(5:4)と言って、夫婦を戒めました。アナニヤとサツピラは、二人とも裁かれました。

今回のゲハジの場合、エリシャが用いた「主は生きておられる。私は決して受け取りません」という言葉を受け、「主は生きておられる。私は彼のあとを追って行き、必ず何かをもらって来よう」と言っています。ゲハジは「主は生きている」という言葉を安易に用いて、自分の行動を正当化し、主を侮りました。

私たちの歩みにおいても、お金、財というものが誘惑になることがあります。その渦中にあっては、真実が見えなくなり、わなにはまっていくのです。そして、今回のゲハジのように、そのような時には嘘や偽りをついてごまかそうとするのです。讚美歌 339 には、けがれた自らをきよめ、私達の唇を偽りを言うことではなく、恵みを歌う器をなし、金も銀も主の前にささげていくことができるようにと歌っています。

ゲハジは自らの罪を重ねることによって、さばきを受ける結果となりました。

主の憐みを期待しつつ、誘惑を小さなうちに退けることができますように。聖霊の力ととりなしをいただいて、退ける心が与えられるよう祈っていきましょう。